様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ７ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４２０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０４６１

研究課題名（和文）明治前期における公立「先進校」の設立と地域的支持基盤の形成に関する実証的研究

研究課題名（英文）The empirical research about the establishment of public"Advanced school" and the regional formation of support foundation in Early Meiji era

研究代表者
鈴木　敦史（suzuki, atushi）

びわこ学院大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：４０６４５３０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治前期の地域社会における公立「先進校」の設立の意義を、その支持基盤の形成との関係に着目して、山形県庄内地方を事例に検討した。その結果、庄内地方においては、ワッパ騒動などの政治的課題に対して強硬な姿勢で臨んだ県令三島通庸による強引な近代化策のなかで公立「先進校」の設立が進められ、さらにこうした学校は、地域の近代化の象徴として天皇巡幸などでアピールされた一方で、予算配分の不均衡などから、地域社会の教育要求とのズレをきたし、その支持基盤に動揺が生じていたことが分かった。

研究成果の概要（英文）：This research considered the significance of the establishment of the public ” Advanced school ” in local community in Early Meiji era while relating this problem to the formation of the support foundation as the case study of Yamagata-ken Shonai area.
This research made it clear that the public "Advanced school" was established in the forcible modernization policy by prefectural governor Mishima Michitsune who work on the WAPPA SOUDOU such as a political problem by the uncompromising posture, and also this school was appealed as the symbol of enlightenment in the area in TENNOU-JUNKOU and the unrest has occurred to a support foundation at the school in a difference's with an educational request of a local community by the disproportion of budget allocation.

研究分野：教育史

キーワード：明治前期　庄内地方　公立小学校　教育要求　地域社会　天皇巡幸　「先進校」

１．研究開始当初の背景

1872（明治 5）年の学制頒布以来、政府主導で実施された公立小学校の設立は、時に地方の人々の教育要求とのズレを来し、人々の生活を圧迫するものとして、強い反発を招いた。その後、こうしたズレや齟齬は、就学奨励策などによって解消が試みられていき、地域にはやがて学校の存立を支持する基盤が形成される。

このような、地域の公立学校の支持基盤の形成に関しては、①人々が学校に対して、「民衆立＝共同所有学校」としての「共同所有意識」を抱いていく過程に関する検討や、②地域社会が、生徒の近代的知識の獲得と住民の社会意識の形成を求めて学校の存立を支持した過程への検討などがなされてきた。

これらの研究は、いずれも、学校を支える地域の人々の地域の学校に対する積極的関与の様相を検討することで、地域社会において学校の必要性が受け入れられ、やがてその学校の支持基盤が形成されていった過程を明らかにした。

一方で、教育の有する政治性（地域の政治的事情によって規定される“教育”“学校”という視点）に注視し、そうしたなかで「支持」される公立小学校の存在と、そうした学校への地域社会が抱く「期待感」を主たる検討対象とした研究は、これまで十分なされてきたとは言えない。

このような研究上の背景を踏まえた時、政治的な地域事情が教育へ及ぼす影響に配慮しつつ、地域の公立学校の学校運営とそれを支持する民衆的基盤の形成について、改めて検討する必要性があると考えられる。

２．研究の目的

本研究では、上記のような研究史の状況を踏まえ、明治前期に行われた明治天皇による地方巡幸において、天皇の訪問を受けた学校に着目した。さらにそうした学校が、地域社会から抱かれた期待感のあり様と、天皇の訪問を受けた事実とともに、その後の地域社会の中で「先進校」として運営されていく過程を検討した。

筆者はこれまで、明治前期における公立小学校の創設とそこに積極的に関与する人々の学校に対する期待感のあり様を、明治 9 年の奥羽・函館巡幸での天皇の学校訪問に焦点をあて、福島県郡山を事例に検討してきた（「明治九年奥羽・函館巡幸における天皇の学校訪問―福島県郡山小学校を事例として―」『日本の教育史学』第 49 集、教育史学会、2006 年）。そこでは、①政府の進める近代化策に同調しつつ地域の開化を目指し、学校の創設・運営に積極的に関与する人々の姿、②そうした人々の、必ずしも教育とは関係しない地域事情（県庁移転問題）を背景とした学校への期待感、③天皇の学校訪問に際して、そうした期待感を背景に「特別な」運営がなされた公立小学校が、地域の開化の象徴としてアピールされる実情、が明らかになった。また、そうした地域的事情に影響されながら進められる学校運営の意義と問題点についても、福島県安積郡を中心に検討を続けてきた（「明治前期における公立小学校の学校運営と地域利害―福島県安積郡郡山小学校の事例を中心に―」第 55 回　教育史学会 2011 年（於京都大学））。

明治中期以降、当初認められなかった公立小学校への天皇・皇后の「御真影」の下付は、天皇との「特別ノ由緒」のある学校に対して例外的に認められ、その際の条件となったのが巡幸での天皇の訪問だった。本研究では、このように、天皇巡幸における天皇の訪問をきっかけに天皇との「由緒」を得て、地域の他の学校と「差別化」された「特別な」運営がなされた公立学校を「先進校」と位置付けて、その学校が地域で果たす役割、他の学校へ与える影響、そしてそうした学校の地域社会における支持基盤がいかなるものであったのかを検討した。

３．研究の方法

上記の目的のもと進める本研究では、対象地域を、山形県庄内地方（旧酒田県）とした。具体的には、明治 14 年巡幸で天皇の訪問校となった、朝暘小学校（田川郡鶴岡）、琢成小学校（飽海郡酒田）を検討事例に据え、その創設から天皇の訪問に至るまでの期間を検討時期とした。

また、こうした山形県庄内地方の事例を、明治 9 年の奥羽・函館巡幸における福島県安積郡での郡山小学校の事例と対比させながら検討することで、その特徴を鮮明化することを試みた。

さらに本研究では、地域の学校の創設・運営に積極的に関与する人々の学校への期待感を、教育・学校に関連する教育史史料に留まらず、政治史の関係史料からも分析することで、その教育外の関心から成る学校への期待感を明らかにすることに努めた。

４．研究成果

（１）庄内地方の政治課題と県令三島通庸の学校教育政策について。

今回事例として取り上げた明治前期の山形県庄内地方では、前近代から近代移行期における政治機構の変化とそこから生じた諸矛盾が、近代化を推し進める県政と地域社会の軋轢を生み、政治課題として表面化していた。こうした地域社会の動揺は、1873（明治 6）年以降起こるワッパ騒動へと展開するが、こうしたなか、当時の内務卿大久保利通の強い意向により県令に就任したのが三島通庸だった。

その際、1874（明治 7）年 12 月以来、第 2 次酒田県とその後成立する第二次山形県で県令を務めた三島が、地域開化の手段として一貫してこだわったのが、道路事業と学校教育政策であった。

三島の学校教育政策の特徴は、地域社会に「模範」となる「盛大ナル一学校」を創設し、その影響を県下に及ぼしていくというものだった。そしてこの方針のもと、1876（明治 9）年 8 月には、西田川郡鶴岡に朝暘小学校が開校し、1879（明治 12）年 11 月には飽海郡酒田に琢成小学校が開校した。両校には、後にそれぞれ西田川郡中学校、飽海郡中学校が併設され、共に擬洋風の荘厳な校舎を擁した。両校は、明治 14 年に実施された天皇巡幸において、明治天皇の訪問を受けた。

本研究を通して、県令三島が積極的に進める開明的な学校教育政策が、地域における「模範」的で「盛大ナル」学校を創設させていった過程が、当時の政治課題やその後の天皇巡幸との関わりの中で整理された。

（2）明治 14 年の地方巡幸と明治天皇の学校訪問について。

明治前期の地方巡幸では、「皇化未ダ洽カラズ」「旧習ニ泥ミ、覇府アルヲ知ラ」ない「辺陬ノ民」に対しての、新たな近代天皇像の形成とともに、地方の近代化状況を検分が重視された。その際、地域社会の近代化の象徴である、県庁や裁判所、学校が訪問地として重視された。

明治 14 年の地方巡幸における学校訪問の概要と、山形県内での巡幸の実際については、右の表・図の通りである。

ここからは、訪問先の学校のうち、札幌農学校や師範学校といった中等教育機関に関しては、その多くで天皇の訪問が実現し、授業や体操、朗読の天覧や教師への恩賜が行われていることがわかる。また、そうした学校に付置されている小学校も、同様の訪問を受けている。一方、中学校の一部や公立の小学校のほとんどは「小休」の為の訪問で、地域社会の学校教育事情の検分は校舎等の設備面にとどまり、むしろ、道中の休憩の場としての訪問の傾向が強いと推察される。さらに、こうした傾向は、本研究において明らかになった、明治前期の六大巡幸全体における学校訪問の悉皆調査（5-(1)-①、5-(2)-①）でも、同様の傾向がみられた。

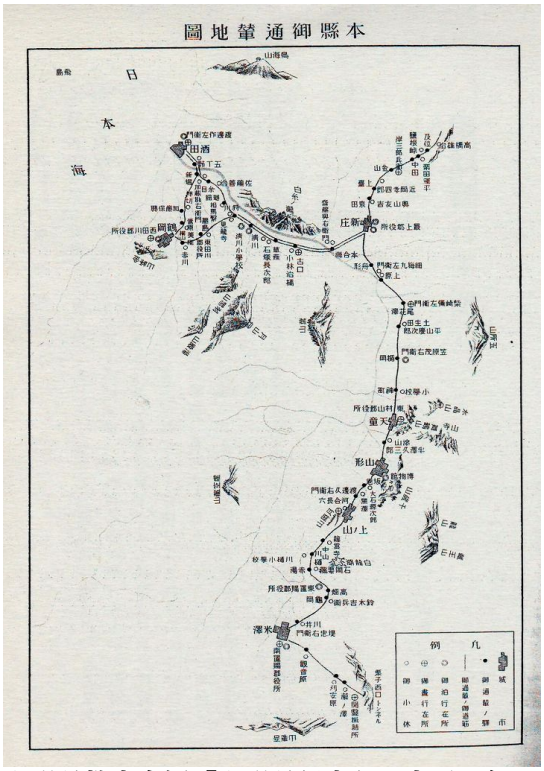
こうした検討から、明治期の地方巡幸における上述の学校訪問の意義と、その学校の種別による訪問目的の違いが、山形県内の事例において確認され、またそれが全国的な傾向としても指摘できることがわかった。

明治14年巡幸における天皇の訪問校一覧

1881(明治14)年　北海道・秋田・山形巡幸（7月30日―10月11日）

月日	学校名		内容
8月9日	医学校	函館県函館市	宿泊
8月10日	白石小学校	宮城県白石町	宿泊
8月24日	八戸小学校	青森県八戸市	宿泊
8月31日	札幌農学校農園	北海道札幌市	生徒の真象天覧，園内施設巡覧．
9月1日	山鼻学校	北海道札幌市	屯田兵収穫の農産物、製作品天覧
	札幌農学校	北海道札幌市	農学校生徒の桜象、真験天覧
9月6日	田植師範学校付属舎	北海道七飯村	小休
	医学校	北海道田植市	宿泊
9月13日	金城小学校	秋田県能代郡町	宿泊
9月17日	秋田女子師範学校	秋田県秋田市	師範学校、女子師範学校長等生徒の書籍朗読、理科真験天覧，付属女子小学生の唱歌天覧，教員に酒肴料、長等生徒に賞嘉．
9月20日	裕和小学校	秋田県金浦町	小休
	岩崎学校	秋田県岩崎町	小休
9月23日	清川小学校	山形県清川村	宿泊
9月24日	鶴岡学校（西田川郡中学校兼鶴岡小学校）	山形県鶴岡市	中学校長等生徒、小学校長等生徒の書籍朗読を天覧，体操天覧，校内に陳列する古器物、物産品天覧，教員に酒肴料、長等生徒に賞嘉．
9月25日	琢成学校（飽海郡中学校兼酒田小学校）	山形県酒田市	中学校長等生徒、小学校長等生徒の書籍朗読を天覧，校内に陳列する古器物、物産品天覧，教員に酒肴料、長等生徒に賞嘉．
	清川小学校（東田川郡中学校兼清川中学校）	山形県清川村	宿泊
9月29日	狩町小学校	山形県東根村	小休
9月30日	師範学校	山形県山形市	長等生徒書籍朗読、理科真験を天覧，教員に酒肴料、長等生徒に賞嘉．
10月1日	川糠学校	山形県中川村	小休
10月2日	興譲学校（南置賜郡中学校兼米沢小学校）	山形県米沢市	中学校長等生徒、小学校長等生徒の書籍朗読を天覧，教員に酒肴料、長等生徒に賞嘉．
10月3日	医学校	函館県函館市	宿泊

日本史籍協会編『明治天皇行幸年表』昭和57年、東京大学出版会，毛利竹彦『明治乃行幸』昭和19年、東興社，宮内庁編『明治天皇紀』昭和44年、吉川弘文館，ほかに筆者作成．



山形県教育会編『山形県行幸記』大正 5 年

（３）明治天皇の朝暘学校・琢成学校訪問について

明治 14 年 9 月 24 日、明治天皇の訪問を受けた朝暘学校では、学務課属、学務委員といった地域の教育関係者をはじめ、教員、生徒が奉迎をし、そこでは県令三島によって同校の教則や校則、そして教員、生徒の祝辞と名簿が渡された。さらに天皇は、校内を検分した後、生徒の体操や小中学校の優等生徒の課業を見、その後、校内に設けられた博物場や物見台から、当地の物産品や放牧牛の様子を天覧した。中庭では、製糸就業の天覧も行われた。なお、同校訪問にあたっては、「金弐拾参円五拾銭　朝暘学校教員四十七人」をはじめ、教員と学業を天覧に供した生徒には恩賜がなされた。

さらに翌 9 月 25 日に天皇の訪問を受けた琢成学校では、教員生徒の奉迎を受けた天皇は、県令三島の先導により校内に入り、教員の祝辞と生徒の課業に触れ、また校内に展示された物産品や古器を巡覧した。なお、朝暘学校同様、「金拾五円五拾銭　琢成学校教員一同」他、同校の教員と課業を天覧に供した生徒には、恩賜がなされた。琢成学校に通う小学生の記録からは、天皇の訪問と「褒章」、そして「奮励」は、「我地方ノ幸運」と理解されたとの記述も見受けられた。

以上のことから、県令三島通庸の主導的な関与のもとなされた地方巡幸における天皇の学校訪問が、訪問校に対して、他の学校との差別化（皇室との「御由緒」）の根拠を与え、さらにそこに通う子どもたちにも、天皇・皇室との精神的な結びつきと、そこから派生する、地域や学校への「特別なもの」という意識が形成されていった実態が明らかになった。

（４）公立「先進校」創設の意義と地域社会との関係について

天皇の訪問を受けた朝暘学校・琢成学校の両校は、ともに県令三島通庸の地域教育政策の機軸として、西田川郡、飽海郡の「模範」として創設された「先進校」であった。

しかし、三島のこうした地域教育政策は、地域の「先進校」を、「盛大ナル一学校」として特別に盛り立てた一方で、1879（明治 12）年 11 月の飽海郡平田郷の 55 カ村農民惣代による「民情上申書」では、琢成学校以外の学校が基本的な条件整備もままならないままに放置されていることへの批判がなされており、地域社会における学校間格差を創出していた側面も窺えた。

以上の検討から、県令の強いリーダーシップで進められた近代的「先進校」としての公立小学校の創設と、その支持基盤となる地域社会の人々の教育要求には、ズレが生じていたことが明らかになった。

（５）他の事例との比較について

今回の山形県庄内地方における検討では、学校教育政策の展開と公立「先進校」の地域的支持基盤の形成に関しては、当地が抱えた政治課題の影響が少なからずあったことがわかった。一方で、こうした地域の政治課題の学校教育政策における影響は、その背景を異にしながらも、他の地域でも見られた。

本研究では、山形県庄内地方との比較事例として、福島県安積地方を取り上げたが、そこでは、明治９年の巡幸において天皇の訪問を受けた郡山小学校が、県庁移転運動をはじめとする地域利害の中で、その後も地域の「先進校」としての役割を担っていったことがわかった（鈴木敦史「明治前期における公立小学校の設立・運営と地域利害－福島県安積郡郡山小学校を事例として－」『関西教育学会研究紀要』第 18 号、関西教育学会、2018 年 8 月発行予定）。さらに安積郡では、県庁移転運動の挫折後、福島中学校の誘致が計画されたが、そこにでは、「実現しなかった県庁移転の代わり」としての意味合いが強く意識されていたことが分かった（5-(2)-②）。

このような実態を踏まえた時、地域社会における公立「先進校」の創設と運営には、教育的な視点を超えた、様々な地域課題が少なくない影響を与えており、そうした側面が、学校の支持基盤のあり様をも規定していることが確認できた。

５．主な発表論文等

（１）〔雑誌論文〕（計１件）

①鈴木敦史「地域社会における公立学校の創設と天皇巡幸－山形県庄内地方を事例として－」『びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要』第 8 号、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要、2017 年 3 月。

（２）〔学会発表〕（計 2 件）

①鈴木敦史「明治前期における公立小学校の設立と地域社会－山形県庄内地方を事例として－」2016 年 12 月、第 68 回関西教育学会（於立命館大学）。

②鈴木敦史「明治前期における福島尋常中学校移転問題」2017 年 11 月、第 69 回関西教育学会（於大阪市立大学）。

６．研究組織：びわこ学院大学
研究代表者：鈴木敦史
研究者番号：4064530

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）